

日本陸上選手権での選手へのケーブル接触と再発防止策について

2022年5月7日(土)に、東京・国立競技場で開催された第106回日本陸上競技選手権大会10000mで、中継カメラのケーブルが選手に接触しました。カメラマンが安全を十分に確認しないままトラックを横断しようとしたための事故であり、今回の事案で負傷された選手ご本人や所属チームの皆様、公益財団法人日本陸上競技連盟の皆様には深くお詫び申し上げます。これまでに判明した事案の概要と原因、それらを踏まえた再発防止策について説明します。

1. 概要

5月7日(土)午後7時～9時5分、NHK BS1で男女の10000mのレースを生中継した際、午後8時50分頃、男子の2組目のレースで、1位の選手がゴールしたあと、第1コーナーの内側から撮影していたワイヤレスカメラ担当のカメラマンが、安全を十分に確認しないままトラックに入りました。カメラマンと送信機を背負った補助スタッフの間のケーブルが後ろから来た選手の進路を塞ぎ、ケーブルが頸部に接触しました。さらに後続の4人の選手も進路変更や減速を強いられる結果となりました。当該カメラマンは、その後も撮影を続け、技術責任者に接触の事実を伝えたのは、放送終了後の午後9時15分頃でした。

2. 原因

当該カメラマンは競技中のトラック横断の経験はなかったため、現場責任者であるチーフプロデューサーやディレクター等は放送前の打ち合わせ等でカメラマンに対し、トラックを横断するタイミングや横断方法について具体的に説明すべきでしたが、「安全に注意して撮影や移動をしてほしい」という表現にとどまり、安全に関する指示が不十分でした。またNHKでは、これまで、競技中のトラックを横断する際は、カメラを肩から降ろして、左右の視界を確保したうえで、後続の選手との間に十分な距離があることをカメラマンと補助スタッフが複眼的に確認していました。当該カメラマンは、1位の選手がフィニッシュラインを越えるまでフィールド内で撮影を続け、その後、カメラを肩にのせたままトラックに入っており、横断のタイミングが遅れて時間的な余裕がなかったことと、カメラを肩にのせたままだったことが、安全確認が不十分になった要因と考えられます。

3. 再発防止のための取り組み

スポーツ中継における競技者の安全を最優先に考え、安全管理、危機管理の意識を徹底するため、以下の4項目の再発防止策に取り組みます。

- ① スポーツ中継における職業倫理を明文化し、安全管理、危機管理のマニュアルを作成
スポーツ中継に携わるスタッフ全員の行動規範を明文化します。
- ② 「リスクチェックシート」の運用で増員等の追加対策を検討
ワイヤレスカメラなど、競技者に近く、リスクが高い機材等を含む中継については、リスクをチェックするためのシート作成を義務付け、必要に応じてスタッフの増員などを行うことでリスクを低減します。
- ③ 職員等への研修の実施
上記、①及び②を現場に徹底するため、関連団体や外部プロダクションも参加する合同研修を実施します。
- ④ 競技団体との連携強化
事前に大会の主催団体や競技団体からのご意見・ご要望をきめ細かく聴き取って現場に反映するとともに、NHK側の準備状況についてもより丁寧に説明し、一層の安全管理に努めます。

再発防止の取り組みを徹底し、競技者の皆様や観客、関係の皆様の安全を最優先に、スポーツ中継を実施してまいります。